ワンポイント 稲作

田植え後の管理について

秋田地区営農センター 係長　嵯峨 大輔

●これまでの経過

今年度は5月中旬より田植えが始まり、18日の週は天候不順・低温の影響で一部代枯れが見受けられましたが、後半は温度も上がり順調に生育しています。

今後は雑草の生育も早まることが予測されます。雑草が繁茂すると生育不良や「カメムシ斑点米」被害の要因となりますので、一発除草剤でも残草してしまった圃場では中・後期剤を使用して徹底除草をしてください。

●今後の主な管理

①水管理について

安定した収量を確保する上で、水管理はとても重要です。分げつは、日平均水温23～25℃で、日気温較差が大きい場合に発生が促進されます。潅水は、早朝に行うことが理想です。午後からの潅水は水温を下げることになります。きめ細やかな水管理が安定収量につながります。

低温の目安 ・・・ 平均気温20℃以下、最低気温17℃以下

深水の目安 ・・・ 幼穂形成期　10cm程度
減数分裂期　15cm以上

②病害虫防除について

葉いもち病

「穂いもち病」の被害を未然に防ぐため、本田の「葉いもち」の防除を適正に行いましょう。

箱処理剤や移植時に側条施用しない場合は、「オリゼメート粒剤」を6月12日～18日の間に10a当たり2kg散布します。病斑が確認された場合「ブラシン剤」や「ビーム剤」を散布しましょう。

稲こうじ病

低温多湿の年や前年発生圃場では発生しやすいので、防除を徹底しましょう。

出穂前10日～20日の間に、「Ｚボルドー粉剤」、混合剤では「ラブサイドベフラン粉剤」を使用します。「Ｚボルドー粉剤」は撒きムラがあると薬害になりますのでご注意ください。

③中干し・充実度不足対策について

6月下旬までに、あきたこまち21本／株（70株植え）、24本／株（60株植え）程度を確保したら中干しを行いましょう。無効分げつを増やすと、全ての籾に栄養が行き渡らず未熟米が発生し充実度不足の要因となります。中干しは7～10日、圃場に軽く亀裂が1～2cm入り、足跡がつく程度とします（過度の中干しは根を痛め稲体の衰弱に繋がります）。幼穂形成期（7月15日頃）前には終了するようにしましょう。中干し後、すぐに湛水に戻さず、間断かん水に努めてください。

初期・一発剤で対処しきれなかった雑草については以下の薬剤を散布しましょう。

薬剤名	使用量	対応雑草	使用時期	使用方法
レブラス粒剤	1kg/10a	ノビエ、ホタルイ、オモダカ他	移植後14日～ノビエ4葉期（収穫60日前まで）	湛水散布（水深3～5cm）
クリンチャー粒剤	1kg/10a	ノビエ	移植後7日～ノビエ4葉期（収穫30日前まで）	
クリンチャー粒剤	1.5kg/10a		移植後25日～ノビエ5葉期（収穫30日前まで）	
クリンチャーEW	100㎖/10a		移植後20日～ノビエ6葉期（収穫30日前まで）	湛水散布（水深3～5cm）又は落水散布
バサグラン粒剤	3～4kg/10a	ホタルイ、オモダカ、シズイ、クログワイ他	移植後15日～55日（収穫60日前まで）	落水散布又はごく浅く湛水して散布
バサグラン液剤	500～700㎖/10a		移植後15日～55日（収穫50日前まで）	
クリンチャーバスME液剤	1,000㎖/10a	ノビエ、ホタルイ、オモダカ他	移植後15日～ノビエ5葉期（収穫50日前まで）	

★今月のあなたの運勢 2020年6月★　獅子座（7.23～8.22）　予定通りに進まなくても慌てないで。スケジュールを調整すれば何とかなります。笑顔が幸運を招く鍵